

## 能からみた「うらみ」の感情 — 謡曲「井筒」と「葵上」との比較を通して —

田村 知子

### I. はじめに

近年、国際化の波が来ていると言われ、異文化理解の大切さが叫ばれている。海外からの出稼ぎ労働者も年々増える傾向があったり、西欧諸国から日本の映画が評価され、海外でリメイクされたりもしており、異文化間の交流も増大している。また、国際化の波の中で、日本の文化的評価が高まってきているのが、テレビの中で報じられているニュースからもそこはかたなく伝わってくる。それにつられてであろうか、レトロな着物をお洒落だと感じ始め、一つのファッションとして楽しんで生活に取り入れている若者達の姿をよく目にするようになった。若者の中にも日本の伝統文化に再度価値を見出そうとする動きが出てきているようである。異文化理解という言葉や、国際化の波という言葉や、日本ではなく、海を隔てた外の国に視点を移すことが強調されがちであるが、日本を客観的に見る機会に恵まれるために、自国の文化の再認識、再評価に繋がることもあるのかもしれない。しかし、物事はそう単純でもないような気がする。今まで日本人は自国の文化を省みず、欧米諸国に倣ってその後を追いつけていたが、その当の欧米諸国が日本の文化に興味を示し、その価値を高く評価しだしたことに、内心日本人は戦々恐々としていないだろうか。“欧米諸国の人々は、それまで見向きもしなかった自分の国の文化について、どんな質問を我々

に投げかけてくるのか”と。確かに、小・中・高校を通して、学校では日本史を学ぶし、日本に住んでいるのだから、日常の中で自分の国の文化に接することは多々ある。知識としても、経験としても全く知らないわけではない。しかし、海外の人々、特に欧米の人々が熱心に日本の文化を知ろうとするその気持ちには、我々が日常では忘れ去っている、ある何かに対しての尊敬の眼差しが含まれている。その眼差しに我々日本人は戦々恐々としながら、それと同時に、どこかで忘れてしまっている日本人の心をふと垣間見ているのかもしれない。あるいは、日本の文化を評価してくれる海外の人々の目に、自分達の新しい可能性を発見する手がかりを見つけようと期待しているのかもしれない。そして、それは、国際化の波の中で自分が抱いて立つための、「日本人」というアイデンティティの足場作りをしようとするということでもある。「私はいったい何者であるか。どこへ行き、どこへ向かおうとするのか」。この問いに答えてくれるものを、日本の文化に熱い眼差しを向ける人々の中に見出そうとし、そして、そこから眠っていた自己の一部を引っ張り出して、自分の物語にスパイスを加えようとしているのかもしれない。日本人にとって、日本の文化は自分の物語を引き締め、形作る手助けをしてくれるものではないだろうか。では、日本の文化、あるいは日本人の心を真に体得する糸口はどこにあるのだろうか。論者はその糸口の一つとして、

日本の伝統芸能である能の内容と能の物語の構成を後ろで支えている「うらみ」の感情について理解する中で日本文化や日本人の心を垣間見て見ようと思う。

## II. 能と心理療法

### 一能の普遍性・宗教性との関連から一

能は本来極楽浄土への道を開くため行われていた演劇であると言われており、そのルーツは猿楽（能の礎石）の源流である、奈良時代に中国から伝わってきた散楽にまで遡ると言われている。能が現在の形で演じられるようになったのは、室町時代のことで、その歴史は少なくとも600年以上ある。能はその長い年月の間に、その内容を洗練させ、必要最低限の舞台演出だけで演劇として成立しており、能の演劇を総合芸術の域にまで高めている。近年、その芸術性の高さが認められ、世界文化遺産としても登録されており、日本だけでなく、海外からも高い芸術性を評価されている。能は日本が世界に誇れる伝統芸能なのである。しかし、当の日本人は、どれぐらい能に興味を示しているだろうか。確かに能の内容は容易に理解し難い部分を含んでいるが、それは、海外の人にとっても同じであり、むしろ日本語や日本の文化の解らない彼らの方が能を敬遠したくなるのが普通かもしれない。それなのに、日本人よりも海外の人にその芸術的価値を認められるということは何を意味するのであろうか。もし、それに対する答えを強いて挙げるのならば、海外の人は言語や文化を越えて、能が表現している人間の普遍性に心を打たれているのではないか。能の持つ人間理解の深さや、その内容が持つ神聖さ、自分を越えた存在に対する畏怖の念に海外の人々は感動を覚えるのである。そしてそこから、海外の人々は、能から感じ取った東洋の文化、あ

るいは日本文化の独自性や崇高さに対して尊敬の眼差しを送っているのである。能が600年以上の歳月を経過しても、その芸術的価値を損なわず、なおかつ日本人に限らず、海を越えた他の国々の人々にも多くの感動を与え続けていることを考えれば、そこには日本人にとっての真理、もっと言えば人間についての真理をも含んだ価値あるテキストが内在されていると考えられる。能についての本を書いている土屋(2001)は、能のドラマの要素となっている夢についてのメタ・ドラマ論を述べる中で、松岡心平氏による夢幻能（「夢」と「幻」が含まれた能の形式）の発生の契機となる亡霊劇の発生の背景に、勧進聖たちの勧進興行（地獄の有様や亡霊の苦しみの有様を民衆に見せてまわり、民衆の先祖を供養し観客自身の救済を説いてお金を集めてまわっていたこと）にその契機があるという論に賛意を示しながら、夢幻能のカタルシスについて次のように記している。“…「夢」語りも、そこに登場するシテにとっても、僧自身にとっても、演じて語ること自体が救済であり、罪の浄化であったこととつながっている。その欲望や罪を語ることで精神の浄化は果たされたわけである。それは実は観客自身の浄化であり、それを見ている観客自身が僧の夢語りの世界で自分の煩惱を赤裸々に見ていることになる。（中略）僧が全てを語って成仏したシテを見送る時は、観客もまたそのシテを見送っている。その瞬間の感動は、浄財をはきだして罪を浄化することと、同じである。”人が能を見て感動する背景には、能を見ることによって、自己が内包している罪が浄化されるために起こるものなのである。そして、その自己が抱えている罪が多くの人々が持っている罪と共通するものであり、時代の変遷にも変わることなく人が持ちつづけている罪であるために、能は多くの人に感動を与えつづけているのだ。能の物語には時代を越

えた人間の罪の深さと、同じように罪を繰り返す人間の儚さが見て取れるのである。

一方、心理療法は自分の人生に起こったことに対して、自分が納得するような答えを「語れる」ようになることが、治療の終着点となり、心理療法の終わりとなる。それは、自分に起こった出来事を科学的に客観的に説明し、理解することだけではなく、「なぜ、今起こったのか」、「なぜ、私がこんな思いをするのか」と言った、「なぜ？」という不思議に自分で納得できる答えを探す過程でもある。そして、その答えを探す過程は、河合（1996）が“「そのときに、その人にとって納得がいく」答は、「物語」になるのではなかろうか。”と言うように、その「なぜ？」という疑問を持った人間（クライアント）の人生を物語る「物語」となる。その際、傍らにいるセラピストは、「なぜ？」に対する納得できる答えが見つかるまでの過程に寄り添い、その作業に向かえる様に目立たず静かに見守っているのである。喩えるならば、セラピストは、「なぜ？」という問いを抱いたクライアント（作家）が語り記す「物語」を傍らで見守り、その「物語」が唯一無二の創造的な作品となるよう、一冊のクライアントのための本が作られるように纏め上げる編集者の役割を担っている。そのため、クライアントは、編集者という、より良い物語の編纂と一緒に協働してくれる相手が見守る中で、自分が気づかなかった自分の気持ちに気づき、そこから、今まで日の目を見ることのなかった相手の気持ちを知ったりする。そして時には、気づかぬ故に知らずに相手を傷つけていた自分の罪の深さを知り、それを「語れる」ようになることが、あるいは、「なぜ？」という疑問に捕らわれて視野が狭くなっていた時には気づかなかった、世界あるいは人の美しさや愛しさに気づくことが、自分が抱いた「なぜ？」という疑問に対する答えを与えてくれる

のではないだろうか。そのため、心理療法という非日常の場面でクライアントがセラピストと出会い、「語る」ことは、能のシテが僧に語る「夢」語りと同質の作用があるのである。心理療法での語りと能の夢幻能での「夢」語りは、聞き手や語り手、そして観客を含めた「語る」作業を共にする人間が、自分の人生を「生きる」あるいは「生きた」ことに納得しようとする、「鎮魂」の作業であり、そして「幽玄の美」や、「もののあはれ」といった世界や人の持つ愛しさや美しさを改めて知る作業でもあると筆者は考える。

### Ⅲ. 「うらみ」という“ことば”

#### —クライアントの主訴に含まれるもの—

能の物語を使って「うらみ」のイメージを広げる前に、私達は日頃「うらみ」という言葉をどのように使っているだろうか。よく考えてみると、日常「うらみ」という言葉を発したり、文字としてしたためたりすることはあまりないのではないだろうか。「うらみ」という言葉が使われる時は、例えばニュースで凄惨な事件が起こり、それに対してキャスターがコメントで、「犯人は被害者にうらみを持っていたのではないか」という時に聞くぐらいである。しかし、言葉として発せられる「うらみ」はあまり聞かれなくとも、雰囲気として醸し出される「うらみ」はもしかしたら日常でも多く体験しているのではないだろうか。その一つとして、クライアントが訴える主訴の中に、語られない「うらみ」の雰囲気が醸し出されている場合がある。

クライアントは、何らかの苦しみや辛さなどを抱えながら心理療法への扉を開かれる。その時に携えて来られる主訴には身体症状に纏わるものや、子どもや親などの家族に関する訴え、自分の心の状態を改善したいというような自分

の心を見つめなおすものなど、様々な訴えがある。そのような訴えは多種多様であるが、その底に流れている感情には「なぜ、こんな状況になってしまったのか。なぜ、私はこんな思いをしなければならないのか。」というような、現状が思い通りにならないことや、自らの運命を呪うような「うらみ」は含まれていないだろうか。「うらみ」と言うと、誰かを攻撃するとか、物や人に危害を加えることを想定しがちであるが、果たしてそれだけであろうか。「うらみ」が持つ憎しみや復讐心などの攻撃性は、前面に出やすく、それを「うらみ」の感情の全てであると言うのは、いい易い傾向があるだろう。しかし、「うらみ」という感情は他者や自己を傷つけるような攻撃性しか持ち合わせていないのであろうか。「うらみ」あるいは「うらむ」という言葉には、もっと人が生きていく上で逃れることができないような奥深い感情が潜んでいるのではないか。そしてそれは、なかなか言葉にしづらい感情であり、また、「うらみ」という感情が持つ攻撃性に目を奪われて見逃しやすい感情でもある可能性がある。そこで、本論文では、「うらみ」という言葉をその用法からだけではなく、その言葉の成り立ちや、能の物語を一つのイメージの源泉として用いながら、「うらみ」の感情が見せる様々な感情の一部を掴み取り、「うらみ」という言葉に一つの枠を与えていきたいと思う。そして、その中から「うらみ」という言葉が紡ぎ出す世界観や日本人の心を垣間見てみたい。

#### IV. 「うらみ」とイメージ

##### 1. 「うらみ」の定義

「うらみ」と一言でいっても、その感情は色々なものが複雑に絡み合った感情であるため、その定義が難しい。しかし、「うらみ」について

調べるにあたり、まず、どのような感情であるかをある程度押さえておく必要はあるだろう。そこで、ここでは、山野が『うらみの心理—その洞察と解消のために—』(1989, 創元社)で記している「うらみ」の定義を借りて、「うらみ」の感情に大まかな外枠を与えてみたい。山野(1989)は「うらみ」を“他者から与えられた不当な仕打ちによって生じた不快感を、辛抱し続けた苦しみを基調として発現する感情である”とし、「うらみ」を二つに大別している。一つは“相手への甘えや一体感欲求が拒否されて生じた受動的な敵意であり、甘えとアンビバレンスな関係にある感情”としての「恨み」であり、もう一つは、“相手がどうしても甘えや一体感の回復欲求に気づかないため、恨みが解消せず、その苦しさには耐え切れず害意を抱くようになった時の感情、あるいはパーソナルな関係がなかった相手から不当な仕打ちを受けながら、直ちに報復できず害意を抱き続けている時の感情”としての「怨み」である。しかし、「うらみ」を抱くその根底にはうらむ対象とのかかわりの回復が秘められており、「うらみ」を解消するにはその対象とのかかわりの回復が必要不可欠であると山野(1989)は述べている。筆者はこの定義を参考にしながら、さらに、「うらみ」の感情が持つその深遠さや複雑さに迫っていくことにする。そして、その感情の持つ深遠さや、複雑さに迫るための一つの媒体として、「うらみ」について多くの演目を持つ能の謡曲を取り上げたいと思う。

##### 2. 謡曲「井筒」と「葵上」から見た「うらみ」

本論文では、数ある能の謡曲の中から「井筒」と「葵上」の二つを主に取り上げながら、両者の内容を検討し、日本人が持つ「うらみ」の心理構造の特徴を考察する。「井筒」と「葵上」に絞った理由については、田村(2005)の論文

に記しているため、詳しくは述べないが、「井筒」も「葵上」も共に現代の人々に受け入れられ、作品として高い評価を受けている点や、双方の謡曲が同じ恋物語であり、なおかつ、第三者の登場によって二者関係に心理的な危機が訪れるという内容の設定が同じであるにもかかわらず、それぞれの内容は対極的な様相を示している点、また、恋愛と言う時代の変化を受けにくい心性（普遍性）を持っている点などを考慮し、「うらみ」の感情を考察するテキストとした。また、「甘え」の感情が受け入れられなかった時に抱きやすい感情である「うらみ」を考察する上で、「甘え」の感情が出やすい二者関係がどう「うらみ」の形成に影響を与えるのかを見るためにこの2つの謡曲は多くの示唆を与えてくれると考えられる。では、「井筒」と「葵上」は第三者によって、二者関係が危機的になる点では同じであるにも関わらず、なぜ、異なった展開になるのであろうか。そこには、「うらみ」の感情の周辺としてある、「未練」や「あはれ」の感情が大きなポイントになっている可能性、さらにもう一つ重要な視点は、語られなかった、あるいは語らなかった「うらみ」と語られた「うらみ」という「うらみ」の状態の相違が深く関係しているのではないだろうか。では、「井筒」と「葵上」それぞれの謡曲をテキストとしながら、以下に「うらみ」の感情を中心にして、「未練」、「あはれ」の感情も含めた感情のつながりを考えていく。なお、謡曲の内容については田村（2005）の論文に資料を掲げて詳しく述べているため、ここでは概略のみ述べることにする。

## 2-①. 謡曲「井筒」

この謡曲は主人公（能ではシテという）である井筒の女（紀有常の息女と言われている）の在原業平への一途な愛情が一貫して描かれており（川西、2001）、「井筒」は恋の永遠性がテー

マとされている（三宅、1995）。しかし、「井筒」は謡曲の傑作であると認められているにもかかわらず、その物語の解釈あるいは理解には様々な議論が今なお交わされている。その中でも「井筒」の主人公である女が生前幸福であったのか、あるいは不幸であったのかという議論は様々な文学研究者や芸術研究者によって行なわれているが、「井筒」の典拠となった『伊勢物語』の注釈書やその他の文献を見てもその文学的解釈として確定できるものは書かれておらず、見る人によってその物語の解釈が異なる作品である。実際、現在ではしっとりとした和やかな恋物語として上演されているが、室町時代末期の演出では、地獄に墜ちている井筒の女の現状を強調して、執心物のように解釈されていた（三宅、1995）。また、馬場（1988）は“小面の裏側に、般若の女が静かに口をひらきかけているのを見る思いがした”と述べており、さらに金関（1999）は“能『鉄輪』や『葵上』では、男の裏切によって、女は鬼に姿を変える。『井筒』のこの物語も、それと同質の要素が内在する。シテの着ける美女の仮面の背後に、「人待つ女」と呼ばれたこの女の、待ち続けねばならぬ怒りが隠されていたとしても、それはむしろ当然である”と述べている。しかし、その一方で、飯塚（1996）は、“最も幸福な女性として理解されていた”紀有常の息女（主人公である井筒の女）像をシテに見ており、統一した物語の解釈が成されていないのが現状である。

このように、能の傑作であり、能の演劇性において重要な位置を占めている夢幻能の代表作であるにもかかわらず、「井筒」のシテの心情理解には様々な理解がされており、それによって作品の物語の解釈が変化する流動性を内包している。それはつまり、謡曲「井筒」が扱うシテの心情が日本人にとって、とても繊細な心理を扱っているということなのではないだろ

うか。その繊細さ故に「井筒」を見る人々はシテの女が演ずるものから読み取る心情に多くの感動を覚えるのではないだろうか。そして、その感動は、ある人には「うらみ」を語らないというシテの心意気を見ることによって、「未練」が極限まで美化した感情である「あはれ」の心情を喚起させ、また、ある人にはその極限まで美化された「未練」があまりにも人間離れしているために、シテの行動や言動に不自然さを感じ、そこから隠れた「うらみ」、すなわち「うらみ」を語れないシテの心の奇妙さを感じ取るのではないだろうか。ここでは、この作品の物語がどのように解釈されるべきなのかは論者の力量を超えているため、その判断は下さないが、一つの物語の主人公に様々な感情を想起させる点については特筆すべきであろう。「井筒」の主人公が抱えている感情に様々な感情を見て取れるということは、ある意味、それらの感情が密接に絡み合っている可能性を示唆するものではないだろうか。つまり、「うらみ」、「未練」、「あはれ」という言葉がそれぞれに宿す感情には重なり合うところがあると考えられる。

## 2-②. 謡曲「葵上」

次に、謡曲「葵上」であるが、この謡曲は、主人公である六条御息所の葵上に対する嫉妬と、貴婦人としてのプライドが深層心理で葛藤する様を描いた、サイコサスペンス仕立ての物語になっており、一見難解であるが、回を重ねて見るたびに面白さが深まっていく、不思議な魅力を持った人気曲である（川西、2000）。典拠となった『源氏物語』では、六条御息所はその死後も長く源氏の愛人達にたたりつづけるが、能の「葵上」では生霊となった六条御息所を横川の小聖（ワキ）が調伏し、生霊は成仏する（川西、2000）。謡曲の後半では鬼女となった六条御息所の怨霊と小聖との激しい闘い

（祈り）の中に、孤独ですさまじい愛の執心をくぐりぬけ、羞恥の美への帰着を見せ（川西、2000）、見ている観客に六条御息所の心の痛々しさを焼き付ける作品となっている。「葵上」では鬼女となった六条御息所の情念の凄まじさを表現するために般若の面が用いられており、それによって、なお一層シテの心の辛さに焦点を当てた演出がなされている。謡曲「葵上」は、シテの「うらみ」とそれが解消されるまでの心の流れを刻銘に描き出した作品なのである。この作品を見る観客は、「うらみ」という誰もが嫌って抑圧しようとする感情を、シテの中に見出し、それがワキによって成仏される様を見て、自分の中にも同じような感情があることに気づき、そのどうしようもない辛さに共感したり、自分の抱く感情を省みて人間の弱さ、心もとなさを感じて自己への洞察を深めたりする。そこには、日常生活では言葉にもせず、生活の中では半分切り離されているような感情ではあるが、自己の中に実はただ眠っているだけの「うらみ」の感情の存在に気付いて、シテの表す「うらみ」の感情を通じて自分の中の「うらみ」の感情を浄化させているのかもしれない。さらには、それと共にそこから六条御息所が「うらみ」を抱かねばならないそのどうしようもない状況や境遇を見て、また「うらみ」を抱かなければ生きていけない六条御息所の生きることの悲しみや儚さを感じ取って、「あはれ」と感じるかもしれない。六条御息所の感情が人を攻撃するだけの憎しみや復讐心だけであるならば、時代を超えてここまで多くの人々に感動をもたらさないのではないだろうか。六条御息所が抱く感情には、般若とならなければならなかったような、生きることの悲しみを含んだ、「あはれ」と重なるような「うらみ」も含まれているのである。そして、時に「うらみ」を語るからこそ、見る人に「あはれ」の感情を起こさせる契機と

なることもありうるのではなからうか。このように、「井筒」と「葵上」の内容をより詳しく見ていくと、一言で「あはれ」、「うらみ」という感情を表すのもさらに難しくなってくる。

## 2-③. 「うらみ」と「未練」と「あはれ」

### —「うらみ」の感情の周辺—

ここで、「うらみ」の感情をより詳しく見ていくために、能の演劇が作られた時代の「うらみ」という言葉が現代で言うところのどのような意味を持っていたかを考えてみたいと思う。そうすることによって、より「うらみ」の持つ感情を多角的に理解すると共に、「うらみ」という言葉のルーツを考え、イメージを広げようと思う。

### 2-③-i. 古語の「うらみ」

旺文社から刊行されている古語辞典〔第八版〕(1995)の「うらみ」という項目を見てみると、意味は次のように記されている(一部抜粋)。

うらみ【恨み・怨み】(名) ①恨むこと。憎く思うこと。②残念に思うこと。未練。③嘆き。悲しみ。④さびしそくに鳴く虫の音。

さらに、「うらみ」の動詞である「うらむ」を調べると、

うらむ【恨む・怨む】〔組成〕語源は「うら見る」からという。「うら」は心の意〔一〕(他マ上二) ①恨みに思う。憎く思う。②悲しむ。嘆く。③不平を言う。恨み言を言う。④恨みを晴らす。仕返しする。⑤(自動詞の用法で)虫・風などが悲しげな音を立てる。

このように、「うらみ」には多くの意味があり、現代の代表的な意味である「憎く思う」という意味の他にも「残念に思う」、「未練」、「悲しみ」、「さびしそくに鳴く虫の音」など、より情緒的で誰でも日常的に体験しそうな感情の一つとして使われていることがわかる。また、「うらみ」の中には「未練」という感情や、「悲しみ」、

「さびしそくに鳴く虫の音」というより「あはれ」に近い感情も内包していることも特筆すべきであろう。次に、「うらむ」という言葉を見てみると、組成のところで、“語源は「うら見る」からとなっており、「うら」は心の意”と書かれている。このことから、「うらむ」という言葉は「心を見る」という意味から出てきた言葉であることがわかると同時に、うら(古語の心は裏が原義) = 裏という意味も含まれ、裏を見る = 物の内に隠れた面を見るということにも繋がるような、深遠な言葉であることがわかる。古語の「うらみ」とは、誰かあるいは何かの対象を憎み、それに対して仕返しをするという攻撃的な意味だけでなく、見方によっては「未練」や「あはれ」の感情に近い、儂く、美しい感情も内包していることを示しておきたい。

### 2-③-ii. 「恨み」と「怨み」の漢字の成り立ち

さらに、「うらみ」という言葉のイメージを広げるために、「恨み」と「怨み」の漢字がどのようにして成り立っているかを考えながら、そこから連想される「恨み」と「怨み」のイメージを考えてみたい。角川書店から刊行されている『角川最新 漢和辞典 第二版』(1975)によると、「恨」という字は“「忛(立心偏)”(こころ)と「良(ごん)”(すなおにきき入れない)とを合わせて、心の中で他人の意見に従わない、つまり、「うらむ」意味をあらわす”という意味で成り立っている。次に「怨」という字は「心(したごころ)」と「夕(ゆう)」、「冂(ふし)」からできており、「夕」は部首としては「日ぐれどき」「夜」などに関係し、「冂」は部首としては、ひざまずいて行う動作の意味を含んでいることなどから、「怨」という字は「心が夜にひざまずいている状態」つまり、心が闇(夜)に平伏す(ひざまずいている)状態をイ

メージすることができるのではないか。このように、二つの漢字の成り立ちを見てみると、「恨み」と「怨み」の感情は、読み方は同じでも、少し違った雰囲気やイメージが醸し出されてくる。「うらみ」と一言で言ってみても、その感情には「恨み」が持つ「心の中で他人の意見に従わない」という「意地」に近い意味と、「怨み」が持つ「心が闇に平伏す」という闇の持つ「魔」や「穢れ」などの人知を超えたものに圧倒されるイメージの意味とは大きな差があるように思われる。

## V. 謡曲「井筒」と「葵上」から見た「うらみ」の昇華過程

このように、謡曲「井筒」と「葵上」の内容の概略と古語のうらみの意味、そして「恨み」と「怨み」の漢字の成り立ちを述べたが、では、謡曲「井筒」と「葵上」の主人公達はどのような状態の「うらみ」を持っていたのであろうか。その状態を考える上で、筆者はそれぞれの謡曲の中で使われている詞章（能の台詞）の言葉に注目して論じてみたいと思う。なお、詞章については、川西（2000, 2001）の本を参考にした。

まず、謡曲「井筒」であるが、その主人公であるシテの気持ちを如実に物語っている詞章の一言は“なつかしい”と言う言葉である。その言葉から推察されることは、「井筒」のシテにとっては、たとえ「うらみ」を抱くことになった出来事であったとしても“なつかしい”と思慕の情を述べることができるまでに「うらみ」の感情が昇華できていると考えられる。そのため、「うらみ」の感情は語られず、またシテが体験した出来事が「うらみ」の感情によって「穢れず」にあり続けるために、見ている者は「あはれ」の感情を喚起させられるのではないだろうか。また、シテは謡曲の冒頭で“定め無き世

の夢ごころ”とも述べており、人の世の無常観を「語る」心も持ち合わせている。その心は、「生きる」ことの儂さと、愛しさ、そして美しさを感じる心でもある。「井筒」のシテは、「うらみ」の感情を語ってはいないが、それは無常観という宗教性の支えがあったことによって、「うらみ」の感情の闇の部分に引っ張られず、より「生きる」ことへの光の部分へエネルギーが向かったために、「井筒」の主人公は「うらみ」の感情を語らずとも「うらみ」の感情を昇華することができたのではないかと考えられる。

次に謡曲「葵上」であるが、主人公の六条御息所も「井筒」の主人公と同じように人の世の無常を“人間の不定芭蕉泡沫の世の習ひ”という言葉で語っている。しかしその力点は「井筒」の主人公の心の力点とは異なり、「生きる」ことはその儂さゆえに、美しさや愛しさは一瞬のうちに廃れてしまうという、「生きる」ことの「かなしみ」を嘆いている。そこには、教養を持ち、世の無常という無常観を知るが故に、世の理を悟ろうともがく六条御息所の苦悩も見受けられる。そのために、“恥ずかしや”という自分の感情の未熟さを恥じる言葉も出てくるのであろう。しかし、六条御息所は「生きる」ことの「かなしみ」に圧倒されて、「うらみ」の感情を「井筒」の主人公のように“なつかしい”という「未練」の混じった思慕の情に昇華できなかったのである。そのために六条御息所は“恨めしや”と言って般若とならざるを得ず、「恨み」が「怨み」に近くなったために僧による祈りが必要となった。観客が六条御息所の語りを聞いて「あはれ」の感情を喚起される背景には、人間が「生きる」ためには、その「生きる」ことが持つ「かなしみ」を避けては通れないことを実感し、人の世の儂さを感じ取るために引き起こされる感情であると筆者は考える。



## Ⅵ. 現代人にとっての「うらみ」の居場所 —「うらみ」を語る・語れない・語ら ないという三様態から—

以上のように、能の謡曲の「井筒」と「葵上」を比較し、また古語の「うらみ」や「恨み」と「怨み」の漢字の成り立ちを取り上げて、「うらみ」の感情を垣間みた。これを基にして、ここでは、現代人の「うらみ」の居場所を三つの様態からそれぞれ論じてみたいと思う。

筆者は「うらみ」の状態には「うらみ」を語ること、語れないこと、語らないことという三つの状態があるのではないかと考えている。それは言われてみれば当たり前のことだと思われるかもしれないが、その当たり前のことが大事であると筆者は考える。なぜならば、「うらみ」を抱いた人間がその三様態をどういう心理で選択するのかを知ることは、その何れかを選択したクライアントと会う際の、セラピストの在り方を変化させる可能性があるためである。そしてその三様態には、語り手が「うらみ」という感情とどのように向き合っているのかが示されているため、その様態を知ることは、クライアントが世界や人とどのように関わっているか、また、クライアントの持つ美意識がどういう構造になっているかを知る手がかりになると考えられるからである。そのため、ここでは、「うらみ」を語ること、語れないこと、語らないことをそれぞれ分けて論じてみたい。

まず、「うらみ」を語ることであるが、最初に押さえておきたいことは、「うらみ」を語るとは、それを聴くことも、話すこともとても辛いものである。それを敢えて語るという態度には「うらみ」という蓋をしておきたい感情に目を向け、それと付き合いことうとする覚悟が必要である。そのため「うらみ」の語りを聴くこと、あるいは「うらみ」を語るとはそれ

相応のエネルギーが必要であり、時機を失するとそのエネルギーによって語り手も聴き手も共に「うらみ」の持つ「魔」や「穢れ」などの人知を超えたエネルギーに圧倒され、傷つき深手を負うことになる。そのため、「うらみ」を語る、あるいは聴く際にはその時機を見定め、語り手と聴き手のエネルギーが同等あるいは聴き手がそのエネルギーにおいて凌駕する状態であれば語り手は語るができないのではないのか。そして、時機に適って「うらみ」を語るとは、「未練」や「あはれ」の感情を伴った癒し、あるいは「かなしみ」に打ちひしがれる魂の「鎮魂」にもつながる大きな宝物を手にするのではないだろうか。次に、「うらみ」を語れない状態であるが、これには東洋あるいは日本独特の文化も相まってさらに二つの状態に分けられるのではないだろうか。まず一つは相手のことを思いやっている状態か、あるいは過去に「うらみ」を抱いた対象を今はゆるそうと、あるいはゆるして対象が傷つかないようにと祈願している状態であり、そしてもう一つは自分の「うらみ」という醜い感情、あるいは「うらみ」の持つ「かなしみ」や、時には人知を超えた「魔」や「穢れ」のエネルギーに自分が耐えられないために圧倒され、解離症状が現れている状態である。この二つは語れないという状態は同じであるが、その力点は異なり、相手が傷つくことがないとわかった際には意識的に語るができるかどうかによって見分けられるものなのかもしれない。そして最後に、「うらみ」を語らない状態であるが、これは相手を守るために敢えて語らないと覚悟する状態であり、また「うらみ」の感情を語らずして乗り越えたからこそ語る必要がない状態でもある。そのため、そこには畏敬の念を覚えるような宗教的な尊さを感じるのかもしれない。

これらの三様態はつながり合い、移行しなが

ら変化していくため、中には語られない「うらみ」から語らない「うらみ」、牽いては語る必要のない「うらみ」へと変化することもあるのではないか。そのため、その過程を経験する者や、付き添って見る者は、その「うらみ」の状態に合わせて「未練」、「あはれ」、「かなしみ」を感じ、そして時には人知を超えた圧倒的なエネルギーを感じて、「魔」や「穢れ」などの計り知れない感情を喚起させられると考えられる。

## Ⅶ. “ことば”に宿る日本人の心

### 1. 「うらみ」が抱える「かなしみ」

能の謡曲や「うらみ」の語源、成り立ちなどを取り上げ、イメージを膨らませながら「うらみ」という感情を中心に、その周辺の感情にも折に触れ色々と論じてきた。ここから、「うらみ」の感情が、憎しみや復讐心などの攻撃性の他にも、悲しみを含んだ言葉であることが推察された。西欧では、「うらみ」と言うと、すぐに、「復讐」という言葉が浮かんできそうであるが、日本人あるいは東洋人には、「井筒」の主人公のように、じっと耐えて待つような「うらみ」もあり、その感情は「未練」や「あはれ」の感情と近い心性を持っていることが窺われる。そこからわかることは、西欧の感情の表現方法が東洋に比べて「動」、つまり動きや語ることなど、他者へ直接影響力を与えるような感情表現が前面に出るのに比べて、東洋あるいは日本の感情は、動の感情を表現するのではなく、「静」、つまりじっと動かず語らないこと、沈黙して周りを静観し、状況を窺いながらその感情を秘めていたり、じっと時が来るまでその感情を表現しないでいたりするような、他者へ間接的に影響力を与える表現を取る傾向があるのではないだろうか。そのため、「動」の感情を表現しやすい傾

向にある西欧の人々には、日本人の「静」の感情、つまり、直接表現されない感情は何を考えているのかわかり難かったり、理解され難かったりする。しかし、日本人が、感情を「動」の形で出さないのは、相手への影響力を回避していたり、関わりを持たずにいようとしていたりするわけではなく、「井筒」のシテのように歌をそつと詠んでみるというような、最小限の「動」の表現で、最大の影響力を与える機会を窺っているだけなのである。そのため、日本の人々によっていざ出される「動」の感情表現は、今までの積もり積もった「動」のエネルギーを一度に全て使うため、恐ろしいほどの威力が備わってくる。そのため、日頃、「静」の状態にいる日本人が、六条御息所のような、時として考えられぬほどのエネルギーを持った、「動」の感情を表現するのに、西欧の人々は度肝を抜かれるのである。このように、西欧と日本には感情を「秘める」あるいは直接言わずに間接的に表現するという点で大きな違いがあるのではないだろうか。そのような西洋と日本あるいは東洋の違いについて河合（2009）は、“日本人は物事を月下で鑑賞するのを好むのに対して、西洋人は、物事を白日の下で理解することを好むのである”と述べており、日本の心の喩えとして月を、西洋の心の喩えとして太陽を挙げている。日本人は「秘める」あるいは、悟られぬように曖昧にするということに親しみや美意識を持っているのである。世阿弥も“秘すれば花”と『風姿花伝』（2005）の中で言うように、思うことや、考えていることを全て言うことや、またそれらを悟られてしまうことは、新鮮な気づきや「あはれ」と感じる日本人の美意識を壊してしまうのである。そのため、日本人は「察する」という能力が、成熟した人間関係に必要とされる。しかし、日本人が「秘すること」や曖昧にすることに美意識を持っていることは良いこと

であるが、その秘めた感情が気付かれることもなく、察してもらえないことも無かったとしたら、つまり、相手を慮っているからこそ語れない気持ちもわかってもらえなかったらどうなるのであろう。そこに、日本人が抱える「かなしみ」が宿るのではないだろうか。西欧では感情を表現し、相手とのやり取りの中でその悲しみは体験される。西欧のそのやりとりは、活気があり、河合（2009）の言うように、まるで太陽のようなエネルギーで発散され、太陽のように明るみに全てをさらけ出した意志がある。しかし、日本はそれとは対照的に感情を秘め、相手との無言のやり取りから言外の意味を察し、その雰囲気の中でその悲しみは体験される。だからこそ、日本の悲しみは報われない、そんな儂く切ない悲しみである。そして、その悲しみは暗がりの中で、ひっそりと佇むような、新月の中での暗闇で光が見えないような絶望感として体験される。しかし、東洋人あるいは日本人は、その体験を、「あはれ」と言いたくなるような、月のように、時には満ちて「動」となり、時には欠けて「静」となるような、時の変化と共に光の輝きの変化を受け入れる意志の強さが備わっているのである。それは、太陽のようにいつも燦々と照らし続けてくれるような活力があり、活気のある意志ではない。そのため、新月の時には、光（希望）は見えぬ路頭に迷うこともある。しかし、また満ちて満月となり、その光を煌々とその身に受ける時が来ると信じて「待つ」ような、月のような意志。それが、日本人が昔から大事にしてきた宗教的な無常観である。それは、西欧からみれば、受動的で、能動性を発揮しない、軟弱な精神であるととられるかもしれない。しかし、その無常観を持つ意志は、未だ練達しないような「未練」などの原初的な感情を「あはれ」の感情にまで昇華するだけの「静」の持つ忍耐力がある。そのため、それはいざと言う

時に受動性から能動性へと主体性を大きく変化させるような大きな力を持って発揮されるのである。そこには、物事を性急に变えるのではなく、状況の変化に応じて「待つ」ことのできる強さもある。そして、それを貫徹するには、秘めるが故に誰からも認められず、世間の明るみに晒されず、太陽の光が当たらない日陰でひっそりと佇んでいたとしても、己が信じた道を突き進む、そんな自己信念がなければできない。貫き通すにはそれだけの強さが必要なのである。そして、西欧の人々が、能や昔の時代劇などを見て、感動を覚えるのは、己の道を無言のまま、語らないまま貫徹しようとする、月のような意志がはっきりとその中で感じ取れた時なのであろう。日本の伝統芸能、能には、そのような意志が自明の如く根付いているのである。

## 2. 「かなしみ」を受け入れること

### —祈りと“今・ここで”の無常観—

このように、日本人は月のような、秘めるような忍耐を必要とする意志を持つ傾向がある。そのため、秘めることによる弊害として、思いが報われない「かなしみ」はいつも付いて回る。その「かなしみ」は時に絶望感であり、孤独感や、空虚感、自分への無力感であったりする。しかし、その「かなしみ」を引き受ける中でしか、その「かなしみ」を昇華させる術はないのではないだろうか。河合（2002）は、キリスト教文化圏の人が持っている「原罪（original sin）」という言葉と対比させ、日本人と韓国人が持っているのは「原悲（original sorrow）」、つまり人間存在の根源にあるものとしての「かなしみ」であると述べている。「かなしみ」は人が生きていく限りついて回るものなのだ。しかし、その「かなしみ」に対して、人がどのように関わるか、それが自分の物語がどのように紡がれていくかの大きな転換点になるのではないだろ

うか。「かなしみ」はいつも我が身の中にある、それを忘れずに、その「かなしみ」をどのように引き受けていくかが、自分の物語を作っていくことであり、「生きる」ということなのかもしれない。秋田(2005)の言う“踏み止まる”とは、我が身の中にある「かなしみ」を“今・ここで”引き受け、「今」を必死で生きていくことなのである。そして、たとえそれがどうしようもなく辛く、生きることさえ地獄であったとしても、月の満ち欠けのように、それは長くは続かないと信じて待つ。そして、「かなしみ」を引き受けて今を必死で生きていくことが「待つ」ことに繋がり、それが時に「魔」や「穢れ」などの人知を超えたエネルギーを、人が抱えられるものにまで変化させ、昇華させてくれるのかもしれない。そして、その「待つ」ことに、“もう二度と同じことが繰り返されないように”と願う、秘めた祈りが込められているのである。日本人は、無言の祈りを捧げながら「待つ」中で、その「かなしみ」を昇華し、「あはれ」の美意識にしていくのである。

## VIII. おわりに

本論文では、能の謡曲である「井筒」と「葵上」を用いながら、「うらみ」の感情について詳しく考察した。まず、能の夢幻能と心理療法の類似点を述べ、次により「うらみ」のイメージを拡げるために、次の3つの方法を取った。①能の謡曲である「井筒」と「葵上」の内容を比較した。②古語の「うらみ」の意味を調べた。③「恨み」と「怨み」の漢字の成り立ちを把握した。以上から「うらみ」の感情は「未練」や「あはれ」の感情ともつながりがあることや、「うらみ」には攻撃性だけではなく、「かなしみ」も含まれている感情であることが推察された。そして、「うらみ」の感情の昇華の方法を謡曲「井

筒」と「葵上」の「うらみ」の感情の昇華過程を基にして考察し、そこから「うらみ」の感情の昇華には、「うらみ」の感情が持つ「かなしみ」を引き受けることが必要であることがわかった。最後に、「うらみ」の感情が持つ「かなしみ」を引き受けるためには、無常観という東洋人や日本人が大事にする宗教性が大きな役割を果たしていることを述べた。

## 〈付記〉

本論文は2006年度 京都文教大学大学院 臨床心理学研究科 博士前期課程 修了論文を一部抜粋し、加筆・修正したものである。

## 文献

- 秋田巖 2005 心理臨床家アイデンティティの育成 川畑直人編 鐘幹八郎 Disfigured Therapist 「踏みとどまった者」として— Pp.277 - 285
- 馬場あき子 1988 鬼の研究 筑摩書房
- 土居健郎 1971 「甘え」の構造 (新装版) 弘文堂
- Erich Fromm 1991 愛するということ 新訳版 鈴木晶訳 紀伊国屋書店
- 飯塚恵理人 1996 能『井筒』と中世伊勢物語古注 釈—「待つ女」等の解釈を通して 椋山女学園 大学研究論集 27号 Pp.83 - Pp.94
- 金子直樹 2001 能楽鑑賞百一番 淡交社
- 河合隼雄 1996 物語とふしぎ 岩波書店 Pp.3 - Pp.11
- 河合隼雄 2002 昔話と日本人の心 岩波書店
- 河合隼雄 2002 物語を生きる—今は昔、昔は今 小学館 Pp.255 - Pp.259
- 河合隼雄 2009 日本神話と心の構造—河合隼雄ユング派分析家資格審査論文 河合俊雄 田中康裕 高月玲子訳 岩波書店
- 北山修 1988 心の消化と排出 創元社
- 北山修 1993 北山修著作集 日本語臨床の深層 第1巻 見るなの禁止 岩崎学術出版社
- 北山修 1993 北山修著作集 日本語臨床の深層 第2巻 言葉の橋渡し機能—およびその壁 岩崎学術出版社
- 北山修 2001 幻滅論 みすず書房

- 川西十人 2000 能の友シリーズ1 葵上 白竜社  
 川西十人 2001 能の友シリーズ5 井筒 白竜社  
 金関猛 1999 能と精神分析 平凡社 Pp.41 - 71  
 松村明・山口明徳・和田利政編 1960 古語辞典〔第八版〕 旺文社 Pp.197 - Pp.198  
 三宅晶子 1995 世阿弥は天才である 草思社 Pp.73 - Pp.79  
 M・スコット・ベック 1987 愛と心理療法 氏原寛・矢野隆子訳 創元社  
 溝口剛 2001 対象関係から見た「うらみ」の様相 臨床心理学研究 Vol.18 No.6 Pp.606 - 614  
 織田尚生 2005 心理療法と日本人のこころ—神話を生きる 培風館  
 佐成謙太郎 1931 謡曲大観  
 白洲正子 1993 お能・老い木の花 現代日本のエッセイ 講談社  
 佐竹洋人・中井久夫編 1987 「意地」の心理 創元社  
 鈴木修次・武部良明・水上静夫編 1975 角川最新漢和辞典〔第二版〕 角川書店 Pp.142、Pp.211、Pp.310、Pp.741  
 多田富雄 2005 ほたるの本 あらすじで読む 名作能 50 世界文化社
- 高良聖 2005 雰囲気としての心理面接 そこにある10の雰囲気 日本評論社  
 田村知子 2005 物語から見た対象喪失に伴う未練とうらみの感情（能の謡曲「井筒」と「葵上」の比較を通じて） 京都文教大学大学院 一臨床心理学研究科紀要— 第3号 Pp.13 - Pp.26  
 田代慶一郎 1994 夢幻能 朝日選書500 朝日新聞社  
 土屋恵一郎 2001 能 岩波書店  
 渡辺和子 2005 「ひと」として大切なこと PHP文庫  
 山愛美 2003 言葉の深みへ—心理臨床の言葉についての一考察 誠信書房  
 山折哲雄 2004 涙と日本人 日本経済新聞社  
 山野保 1987 未練の心理—男女の別れと日本の心情— 創元社  
 山野保 1989 うらみの心理—その洞察と解消のために— 創元社 Pp.71 - Pp.74  
 山野保 1990 「意地」の構造 創元社  
 脇田晴子 2005 能楽のなかの女たち 岩波書店  
 世阿弥 2005 現代語訳風姿花伝 水野聡訳 PHP研究所 Pp.96

*Abstract*

## The Japanese Emotion “Urami” from the Viewpoint of Noh: Through analysis of the Yokyoku (Stories of Noh Drama) “Izutsu” and “Aoi-no-ue”

Tomoko TAMURA

The present paper discusses the Japanese emotion “Urami” (similar to grudge/resentment) , through analysis of the Yokyoku (stories of Noh drama) “Izutsu” and “Aoi-no-ue”. The paper first explore the similarity between “Mugen Noh” (dream narrative) of Noh and psychotherapy. Next, three methods are used to expand the images of “Urami”: 1) Comparison between the stories “Izutsu” and “Aoi-no-ue” ; 2) examination of the structural roots of the characters “恨” and “怨” (which are both “Urami”) . It seems that “Urami” is related to the emotions “Miren” (regret) and “Aware” (aesthetic response to the transience of beautiful things) , in addition to which “Urami” includes not only aggression but also sorrow. Further examination of “Izutsu” and “Aoi-no-ue” suggests that in order for the sublimation of “Urami” to take place, it is necessary for the person who holds the grudge to face the sorrow seriously. It is also gathered that for a person who holds the Japanese emotion “Urami”, it is expressed in three ways; to narrate “Urami” ;to be unable to narrate it ; and to not narrate it. The Japanese seem to prefer to hide an emotion like “Urami” in order to prevent oneself from being wounded by the emotion.

Finally, it is suggested that the sense of the evanescence of life which is valued by the Japanese and Easterners plays a major role in order for the begrudged person to face the sorrow, and it is realized that an Japanese who holds the sense of the evanescence of life is able to transform sorrow into a sense of beauty, for the Japanese waiting for better times is equivalent to the act of praying.

Key words : Noh, Urami, sorrow